

小学生の野球に携わって学んだこと

—その2 父からの伝承—

～勝つことよりも大切なことがある～

三 浦 捷 也

(三浦歯科医院 院長)



私の小学生時代には、今のような手軽に会合のできる会場がなかったので、地域でのスポーツ大会の反省会や打ち合わせ会は、私の家が居酒屋や公民館の役割を果たしていた。

当時の家は開放的な間取りだったので、会合の内容や酒を飲みながらの歓談の様子は、否が応でも居間での夕食時に耳にすることになった。大人の酒の席でのことなので、会話の内容までは記憶にないが、不思議なことに父のスポーツ観、教育観だけは、断片的ではあるが今でも私の心にしっかり根付いている。

父は「スポーツは勝たねばならない」と言い張る地域の方々を相手に「学生スポーツは教育の一環、勝つことよりも大切なことがある」といった趣旨のことを主張していた。父の真意がなかなか理解されず、孤軍奮闘していた父の姿、表情が懐かしく思い出される。

今になって、私がスポーツ論議に夢中になると、父と同じようなことを言ったり、やったりしている。思わず苦笑することもあるが、いくつになってもガキっぽく青臭いのは、父親譲りと勝手に自分に言い聞かせている。父は私にとって、学生スポーツの体験をその後の生活に活かした尊敬できる先輩の一人でもある。

小学生の心とからだについて教育書では、精神的には「夢のある、自立に向けての節目の時期」、活動的には「仲間や集団形成節目の時期」、

「基本的な生活能力学習の時期」とされ、8歳から10歳までには成人とほぼ同じ大きさの脳になると書かれている。

父の学生スポーツに対する情熱と使命感が、脳細胞が完成し、影響力の受けやすい私の心に入り込んだのだろう。父との体験を通して、小学生時代にこそ、「スポーツとは何か」、「なぜスポーツをするのか」を感じとる大切な時期であることを学んだ。このことが、小学生野球に携わるきっかけになった。

勝つことが最優先の社会的風潮のなかで、あって私が「小学生にはその心とからだに合ったスポーツの仕方がある」ことにこだわり続ける理由でもある。小学生時代の父からの伝言が、さらに私から小学生へと伝承されている。

今80歳を迎え、振り返ってみると、人生で最も多忙な30歳代後半から70歳代後半まで野球少年と過ごしたことになる。その間、勝敗や結果ばかりが重視されるご時世のなかで、「小学生のスポーツは遊びの範疇を越えてはならない、勝つことよりも大切なことがある」という共通の指導理念を掲げ、コーチとして一緒に活動が続けた元高校球児たちとの出会いとその存在は極めて大きい。コーチたちは、私にとってかけがえのない友人であり、今も信頼のきずなは深い。ここにスポーツの原点がある。それにしても、40年間コーチの方々にとって、自由な



日曜日がなかったことを今になって知り、感慨深い気持ちになる。

小学生時代の父との何気ない体験が、私自身のスポーツ観、子ども観、社会観をも形成し、生活するうえでの基点にもなっている。同時に子どもたちとの野球を通して、スポーツの問題点を探る良い機会にもなった。今さらながら、小学生時代の影響力の大きさに驚いている。

子どもたちにとって、スポーツは悪いはずがないと誰もが考えているが、私は指導の仕方、対応の仕方によっては、健康を損ない、心とからだにも何かしらの障害を与えるように思っている。スポーツをやっていれば、無条件で良い結果が期待できるという考え方は「神話」であると断言する学者もいる。小学生はすべての面で成長途上にある。体の動きだけではなく、心も未熟な状態にある。子どもは単に大人の小型化したものではない。このことをわきまえないで、スポーツを機械的に、一方的に指導する傾向がみられる。子どもと接し、子どもは大人とは別の基準で、別の速度で生活していることも知った。世の中がいくら変化しても、子どもが成長していくには昔と同じような時間がかかるのだろう。それなのに、父兄は目先の表面的な評価によって子どもたちの能力や将来のことまで決めている。そのことがとても気になる。

練習のなかで、子どもの外観や見た目だけではわからない、意外な能力や予想をはるかに超えた著しい変化に直面し、驚かされることも多い。だから、あらかじめ限定することなく、広がりのある視野のなかで子どもに接することが必要ではないだろうか。ここに「勝った、負けた」だけでは指導できない小学生スポーツの難しさがある。私は、小学生のスポーツは仲間と

共に体を動かし楽しむための実践教育であり、野球はそのひとつの手段にすぎないという考え方が強い。練習後のミーティングでは「スポーツには勝つことよりも、もっと大切なことがあるんだよ」、「友だちと助け合いながら、野球を通して大きな強い人間になろう」とさまざまな例を挙げ、子どもたちにもわかりやすく丁寧に伝えている。入団したばかりの1年生の団員に「理事長の言っていることがわかるか？」とだずねると、にっこり笑いコクリとうなずく。当然すべて理解しているとは思っていないが、父との体験から、子どもの頭の片隅に残っていると信じている。たまには「今日の理事長の話はわかりやすかった、感動した」とお調子者の6年生の団員からお褒めの言葉を頂戴することもある。いくつになっても褒められると嬉しいし、元気が出る。いつも「来週、また元気で会おう」でミーティングが終了する。

これまで多くの人に「あなたの考えは現実に関わぬ理想論、もっと現実を見ろ」と言われてきた。でも今、世の中は新型コロナが猛威をふるい、異常気象に伴う災害も続くなど、これまでの当たり前が当たり前でなくなり、常識が非常識になってきた。さらに、「虚偽と欺瞞」の嵐が渦巻いている。このこととスポーツにおける勝利を至上とする社会的風潮とは、あながち無縁とは言い難いような気がする。こんな時代だからこそ、ガキっぱい理想論を説き続ける者が必要ではないだろうか。その声は政治にも、周りの大人にも届かないかもしれないが、純真さの消えない子どもたちの心の奥にしっかりと刻まれ、次の時代に花が開くであろう。子どもを育てることは、次の時代を創ることだと思うからである。